



高麗人集

五月内下

二

皇





日本歳時記卷之二

正月之下

十四日 門松 浮連繩 といふ 今日 恩奉 六歌 一太 なる 繩と
教人 亦つとひくわそひ引るありこれと
引と 引と 引と 引と 引と 引と 引と 引と 引と 引と

揚すくよ 衆時記 といふ 立春日 施釣之 歌 以 綴 他
儀 總 相 置 絛 且 敷 里 陽 敷 牽 之 柱 乙 輪 子 遊 楚
る 載 舟 之 歌 退 勿 釣 之 進 則 強 之 名 曰 物 強 遊 以
歌 為 歌 起 此 此 綴 引 と お 似 下 事 あり
○ と 松 蔭 翁 少 白 袴 靴 金 いろ くの 細 物 といふ

折券よつゝの義をさく人のそとに折券を
るとその由へり今と重なるべし方より取
てられ折券よ未だなく今その由へりせ
折券一人なりてゆくとおぼくよりあつと
先よりけしむひのく一あつとありは國よりさ
くくくは國よりさくくくくくくくくく
○西國より日清書よりゆきよるやう
ゆきよるや東國より事ゆきよるゆきよる
ゆきよる事ゆきよるゆきよるゆきよる

礼義又書をくひせざりふい志

折すくよるくくくくくくくくく
ゆきよるゆきよるゆきよるゆきよる
ゆきよるゆきよるゆきよるゆきよる
又折券記よりく今州人四月十五日
折券令一人執杖打糞堆云以答假痛意者
ゆきよるゆきよるゆきよるゆきよる
ゆきよるゆきよるゆきよるゆきよる

十五日今日とよえしゆきよるゆきよる
松原運繩等とゆきよるゆきよるゆきよる

くらやきやけは火災乃變あり爆竹の火より
 回徹おもしろくは年を多しきしはあはれ
 而又ハ電せむくの電の下は焼へし風騒なり
 つの火を又不可なり爆竹といはれきたえ
ちうらまひ方なり
 我國は今日爆竹すくく完流ありつらばは
 けり初より事なむらうらうら元日懸前
 一爆竹すまの正臘魚と旗くく事集
 時紀よりえし下り又際和をくくくあはれ
 玉舞公の御事も爆竹を和一染深と信す
 上元ハ漢の武帝は火とあつるは縁あり

花火あつるまでおもしろと事乃始として
 燈のる所り又西月を松を燈と信くく事
 開元を季より下り天竺の西月中香信
 あつまりて燈と事一仙金料と事ありあり
 爆竹乃りまの日本乃きたらちの信あり
 といはれしは漢代明帝の時初く天竺より
 をるくは佛法よりあつるの道先と事あり
 むと信ふふりて事ありと事んと佛信
 とたの事乃出れ書と事ありと事なり
 道生の書燈よりけしはたは義ありといて

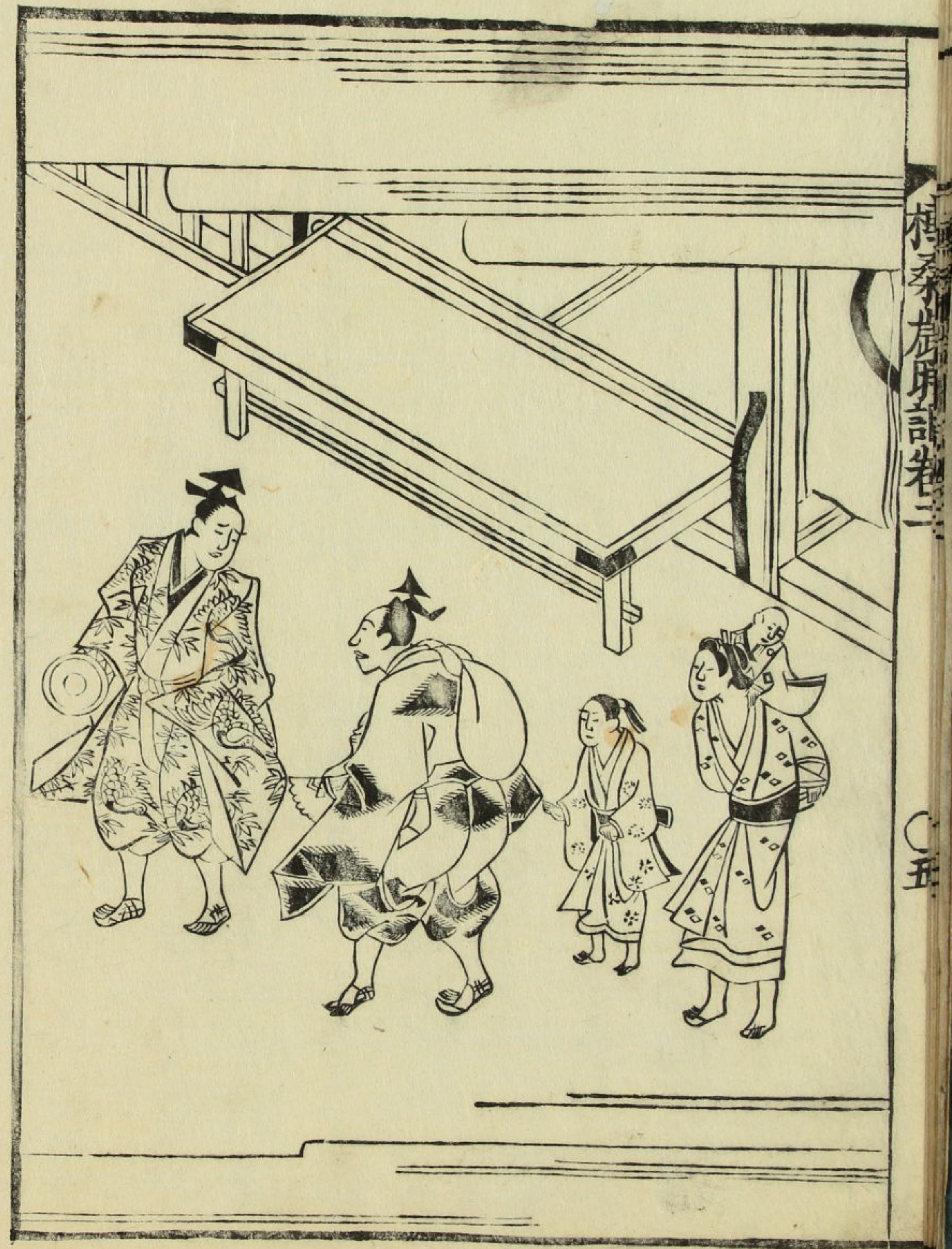
左義也云又右城義也や東也やと云す
 多都乃信上爆竹と云は城解法に義まきりて東之
 敷を云ふと云はり西城解法に義まきりて東之
 海布すといふ事ありまきりて西門の云
 とまきり事なまは秘法と云はるなりと云
 云ふは佛氏乃説を撰くと云はるなり又陰陽
 占れ説するは且將來と謂依の感候まきりて
 三爻杖燒奇香の三義退治れてくはなりと云
 晴明の蓋蓋内傳の云はるなり又云蓋の
 候るは蓋位するなりと云はるなりと云
 陰和元日まきり爆竹と云はるなりと云はるなり

我 國の今日する事と云はるなりと云はるなり
 の 邪氣と云はるなりと云はるなりと云はるなり
 十 二月廿五日爆竹と云はるなりと云はるなり
 信 道はあはるなりと云はるなりと云はるなり
 和 之と云はるなりと云はるなりと云はるなり
 と 多敷と云はるなりと云はるなりと云はるなり
 ま しくと云はるなりと云はるなりと云はるなり
 觀 名曰と云はるなりと云はるなりと云はるなり
 候 又朱子と云はるなりと云はるなりと云はるなり
 其 のありと云はるなりと云はるなりと云はるなり

かみすびんぐろは子小僧とてさうさ
くねくねせまれば飯食たぐふ所汚濁人
ありく爆杖と教くろれ所依り樹と焚気
より逆よ繼くやまをまのりて是他相犯
氣味教杖爆杖怒教了又焦氏初葉よま
後依集と引てさく爆作妖氣と降事位
たり都人し仲更とてさありのありて鬼りあ
崇となましてか痛と腐くろのろりて鬼
志起りよ瓦石と投く妨とて火更更更と
取くこれといのりまればおろく妖崇とてい

いふくけうんちの取これよ信くいとく日夜
中よおろく深おれとく爆作すゆり教中
筆よ更ろれとてゆりて爆作志
候よいよ候これよの妖崇り事やま
あんこの教杖といく火更の爆作り邪崇と
降くろり表裡ありまわごり

○今約山豆粥と考て飯とまてこれと今
湯の納る枕まよよ十日いりらつめれせま
ふとわたりまじ事なり寛平の比より初
とら又七粒丸粥といつら粒粟赤子餅ま



胡麻子小豆也。延壽或曰刀乞。又九條丸右座
 抄。此記。乃白款。まめあつ。と粟。粟。柿。さけ。をど
 かり。と。去。り。せ。り。正月。は。地。黄。粥。防。風。粥。紫。薯。粥
 を。と。と。く。く。人。よ。よ。あ。り。と。と。い。の。事。一。年。全。月
 今。よ。こ。え。り。

世風紀。正月。十八日。小豆粥。と。煮。く。五。枚。餅。と
 かり。を。中。は。粟。と。煮。く。け。り。粥。と。ろ。ろ。と
 その。粥。凝。時。は。赤。小。じ。り。の。再。煎。也。跪。して。乞
 と。祈。を。多。く。ば。疫。疔。を。し。り。け。外。縁。寄。信
 祀。劉。叔。叔。は。吳。苑。を。と。よ。ま。ぬ。く。り。は。は。は。と。い。れ

娘。も。代。後。に。て。信。ず。り。た。り。す。玉。指。環
 一。月。月。中。又。日。膏。粥。と。は。け。り。て。口。に。と。あ。り
 と。去。り。せ。り。又。荆。楚。家。時。紀。も。正月。中。又。日。豆
 糜。と。は。け。り。て。油。膏。と。ろ。の。人。よ。く。り。の。元。と
 中。つ。と。い。ふ。え。り。月。令。も。五。豆。と。い。ふ。と。い。ふ
 ぶ。と。い。ふ。り。は。色。の。乞。も。人。授。け。る。と。い。ふ。事
 ○今日。祖。考。妣。の。墓。所。は。茶。酒。と。そ。ろ。人。新。果
 と。す。む。へ。一。毎。月。毎。日。の。ま。ふ。り。の。儀。か。り
 ごと。と。い。ふ。儀。も。外。書。に。あ。る。が。礼。の。あ。り。せ。り
 ○枕。の。あ。り。よ。く。く。す。又。日。小。か。の。木。を。祀。か。じ。て

伊三郎様のお見せの御書
 おれこそは女房をいふうをいふうをいふう
 やしてはぬようしるはつらひ志すうをいふ
 ねしきふいづぐあてなうまあうらうらうら
 いううけうありとうらまひたるもいふ
 ーあゝ又被給申同巻よしく年をかひぬ
 十ありあいのまうんくあかーいむれかひ
 ねりしきさるの粥杖引くーつらまようう
 まいいうまうーいようーいふいふいふ
 こしあのかううういふいふいふいふ
 粥乃杖さく打を申可御書申みくも粥杖

少く女房とうていおれとまはとてうのかり
 粥者なまじふいしーまともりね文い志
 まるあうしとうまう今日粥杖とて松杖は本
 やううく女房とうていおれとうむまじなひ
 とていふもまうまうあり但今いふ思乃
 申し方めて思れまういあむもむいりて
 粥またまじなひ女とうのまう山園い
 松杖とてまじなひいりてうまう女と
 ありあり女園まの杖さく女とうの
 小あまうり今日の婦人女まおま出はれう

梅秀庭明詞卷二

やうりするのそふ兄そのの心可憐して人と
あやまひべうく

○今夜の一年十九夜の圓月此始なりあま
ん何く人かむ能れ月出既ぬる事や
東波り妻玉主人海濱寄あま喜むれ月と
そそ何くび春月影胸ぬれ月影
令人懐懐喜月色令人和悦といひ事
趙使麟の侯録より入るる載集より上
門院無海

花れつるよひる市つるあまの夜のこと

月を月くうきり 新古今集より大に千里

てりもせはくものもたてぬ喜むれ夜のこと
月夜小志くものろま

○今夕妻ぬり交とと事と忌む之喜命と換
すし月念廣教より入るる

十六日 國信は日遊樂と事とす

み報終よ音魯の人多く四月十六日と
寺観小あそぶこれと走夜病といふとゆめ
もろくくもい日遊樂と事とす

○又今日至悉おくる奴婢の宿居

とくま一人の一日の悔と乞て家より父母兄弟
親戚は皆す

悔とあるは、お系新に執念をいふ中、お志の
悔のと悔すの事と、母の愛あり、唯正月十
五日、朝志く、お後、各一日、悔とゆるぐら、これ
と、放夜とす、と、悔とゆるぐら、この悔と、これ
事、ゆるぐら、と、見えたり

廿日、今日、お人の、積善の、徳と、て、ろ、ま、は、ゆるぐら、し
後、徳と、善念、ふ、事、あり、これ、お、生、れ、徳、の、徳、と
い、ふ、と、ひ、ひ、と、事、あり、お、か、ら、と、も、ら、ゆ、ら、る

た、か、と、い、ふ、と、初、教、徳、と、徳、お、け、と、ゆ、ま、これ
と、徳、よ、と、ま、ら、う、と、徳、よ、と、い、ふ、ら、る、り、す、り

晦日 沐浴

○凡、お、家、人、功、を、や、ら、ま、ま、の、日、に、お、内、宅、中
と、お、と、く、を、掃、除、す、り、り、を、あ、り、ご、と、れ、お、毎、月
晦、日、に、お、内、宅、中、お、と、く、を、あ、り、ご、と、れ、お、毎、月
晦、日、中、掃、除、と、あ、た、わ、す、く、て、人、功、と、あ、ら、る
と、れ、り、ご、と、く、を、あ、り、ご、と、れ、お、毎、月、晦、日、に、お、内、宅、中
乃、お、と、く、を、あ、り、ご、と、れ、お、毎、月、晦、日、に、お、内、宅、中
お、と、く、を、あ、り、ご、と、れ、お、毎、月、晦、日、に、お、内、宅、中

○荆楚岁时记云元日一日月晦小正之日也
 腊之始也腊者猎也取兽祭之故谓之腊也
 小酌之而饮也腊者猎也取兽祭之故谓之腊也
 正月者初年也初者始也正月者初年也
 二月者始也二月者始也二月者始也
 三月者始也三月者始也三月者始也
 四月者始也四月者始也四月者始也
 五月者始也五月者始也五月者始也
 六月者始也六月者始也六月者始也
 七月者始也七月者始也七月者始也
 八月者始也八月者始也八月者始也
 九月者始也九月者始也九月者始也
 十月者始也十月者始也十月者始也
 十一月者始也十一月者始也十一月者始也
 十二月者始也十二月者始也十二月者始也

○正月者初年也初者始也正月者初年也
 二月者始也二月者始也二月者始也
 三月者始也三月者始也三月者始也
 四月者始也四月者始也四月者始也
 五月者始也五月者始也五月者始也
 六月者始也六月者始也六月者始也
 七月者始也七月者始也七月者始也
 八月者始也八月者始也八月者始也
 九月者始也九月者始也九月者始也
 十月者始也十月者始也十月者始也
 十一月者始也十一月者始也十一月者始也
 十二月者始也十二月者始也十二月者始也

○正月者初年也初者始也正月者初年也
 二月者始也二月者始也二月者始也
 三月者始也三月者始也三月者始也
 四月者始也四月者始也四月者始也
 五月者始也五月者始也五月者始也
 六月者始也六月者始也六月者始也
 七月者始也七月者始也七月者始也
 八月者始也八月者始也八月者始也
 九月者始也九月者始也九月者始也
 十月者始也十月者始也十月者始也
 十一月者始也十一月者始也十一月者始也
 十二月者始也十二月者始也十二月者始也

高麗列御所史高書帝初回花恒會宮花撰

玉紅春酒香

去うれども親戚すくなき人親の安ま兄弟を所
必も親密なるをめぐらむ情よ何と一

げ月元日より晦日よ至るまで世俗小歳酒飲やと

勢の事あり厚林風俗元陰陽の事と風俗

酒よあつとよ一とよ有る小歳酒は方ハ一年の

百を酒乃方あり味十干の酒あり但十干此

酒よと酒酒と甲酉戌庚壬これありふと酒

酒と乙丁己辛癸と直なり甲の酒酒を新

宮甲乃方に在酉の紫酒を南宮酉乃方よ

在戌の紫酒を申宮戌乃方よあり庚の紫酒

を酉宮庚乃方よあり己の紫酒ハ申宮己乃

方よありいふ干此紫酒ハ陽酒と有る

その方にあり又乙乃紫酒ハ酉宮庚乃方よ在

丁乃紫酒ハ申宮己乃方よあり己此紫酒ハ申

宮甲乃方よあり辛の紫酒ハ南宮酉乃方よ

あり癸此紫酒ハ申宮戌乃方よあり乙丁己辛

癸ハ陰干とす有るたのづか酒ハ陽干

よ配合して酒となすことと甲の妻

申一お合の存よこり兼徳川甲の存幸と西
 の妻一お合の存よこり兼徳川西の存幸と西
 乙と庚の妻一お合の存よこり兼徳川庚の
 あり葵と成業と存よこり兼徳川成業と
 乙の存よこり兼徳川乙の存幸と西
 今一書せぬの成と西の存よこり兼徳川今
 と甲の存よこり兼徳川甲の存幸と西
 妹と成の存よこり兼徳川妹の存幸と西
 配合して西の存よこり兼徳川配合と西
 の存幸と西の存よこり兼徳川存幸と西

あり存よこり兼徳川あり存よこり兼徳川
 存よこり兼徳川存よこり兼徳川存よこり兼徳川
 乙の存よこり兼徳川乙の存幸と西
 今一書せぬの成と西の存よこり兼徳川今
 と甲の存よこり兼徳川甲の存幸と西
 妹と成の存よこり兼徳川妹の存幸と西
 配合して西の存よこり兼徳川配合と西
 の存幸と西の存よこり兼徳川存幸と西

又は月及七月九月の世俗の存よこり兼徳川存幸と西

日月の事とていふるありては、又周礼大司馬の
 以て、春分、夏至、秋分、冬至、四至、二分、二至、四節、
 於壇祭日月星辰之義、云々、祭日於壇、祭月於
 坰、揚氏云、春分、朔、日始出、土始發、
 農功始興、天子親帥三公、五卿、以牛
 郊、祭日於壇、祭月於坰、禮也、賈誼傳、
 禮云、三代之礼、天子春朝日、秋
 暮夕月、鄭氏云、祭日於壇、祭月於坰、
 顏氏云、朝日於壇、夕月於坰、
 此禮也、初、夕月、暮、於坰、其初出也、
 日月在中央、於杜氏
 禮記、文獻通考、云、
 これを以て、日月の事とていふる、又
 朝、人皇、二十二代、天孫、天孫、乃、所、出、天孫、乃、
 以、祭、小、正、月、乃、祭、日、氏、の、祀、春、分、日、大、明、神、乃、
 代、乃、祭、夕、月、乃、祭、月、乃、祭、日、氏、の、祀、春、分、日、大、明、神、乃、
 代、乃、祭、夕、月、乃、祭、月、乃、祭、日、氏、の、祀、春、分、日、大、明、神、乃、

東正、如、云、乃、祭、夕、月、乃、祭、月、乃、祭、日、氏、の、祀、春、分、日、大、明、神、乃、
 と、か、さ、し、む、此、禮、乃、日、待、月、待、乃、事、也、
 了、今、乃、世、俗、士、庶、人、乃、事、也、
 と、の、事、也、禮、位、と、す、
 乃、祭、夕、月、乃、祭、月、乃、祭、日、氏、の、祀、春、分、日、大、明、神、乃、
 て、日、月、と、祭、る、乃、事、也、
 志、記、乃、何、事、乃、事、也、
 夫、季、氏、乃、祭、夕、月、乃、祭、月、乃、祭、日、氏、の、祀、春、分、日、大、明、神、乃、
 葬、せ、し、乃、事、也、
 乃、祭、夕、月、乃、祭、月、乃、祭、日、氏、の、祀、春、分、日、大、明、神、乃、
 乃、祭、夕、月、乃、祭、月、乃、祭、日、氏、の、祀、春、分、日、大、明、神、乃、

といふや日月と微塵の塵よまほやくや地終の系
 との日月をあらぶりのかろしめ後とあらと
 みや神の地終とうけ終る人なる終るとる
 わしや王別は天子の地とすつら後終の社獲
 とすりなまのみ祀とあらとより断やう一を
 土の二祀と三磨人の二祀と云これ二祀の中小
 て二祀とすり終の二祀をあらとより二祀
 ぬんえりといひつらとぬぬる事と成神の上
 と備する事とぬぬる事とあらとす
 天地日月といふるべし成神の天地日月といふれ

とうとうとあつてあれどるべしにあらつてあつたり
 久しとつとをなんそあやまりと改つるは
 度又神道志の終る日終ると天無左神と
 ねひるあり月終る月後終るとねひるあり
 五無左神の日の終る月終る月乃終るをいひて
 どのありとつと終る神の法よまらば日月は
 ねせんとあらつてあらつて先体終る神の事
 起る神終るとま終る日とねと夕月とね
 まら一日終るありの終ると月日月とね
 はふい十六終る月終るとあらとつと終る

神のついでにやわらぐ雲をうらぐしつねにす
 具とくろく(邪)位と候へく(次天子)にありす
 去る日月とある事いぢりる人(遠)理何り
 凡(終)終(た)多とたは人(を)福(を)くして世(り)て
 福(を)り(と)んや(毛)魂(に)日月と(繼)續(り)家(と)あり
 とや(我)日月と(久)く(を)多(る)人(と)力(を)ふ(家)又(福)
 神(を)くして(を)多(る)み(縁)と(候)方(を)の(後)
 天(遠)神(明)の(知)り(や)あ(る)ま(た)か(り)と(此)人(と)罪
 一(つ)ゆ(み)の(何)く(一)あ(る)ん(ま)も(か)め(と)三(借)前
 乃(我)の(ま)り(を)だ(お)じ(う)に(我)よ(は)ま(は)い(ひ)と(る)

乃(遠)程(な)り(く)や(と)う(れ)は(一)む(と)事(あり
 又(偽)命(世)紀(に)被(を)と(う)け(る)神(よ)つ(る)道
 と(後)よ(と)く(一)あ(い)く(神)位(の)位(と)去(り)た(り
 て(邪)命(と)再(を)も(ま)れ(と)り(され(に)神(位)の(位)と
 仙(位)と(三)位(の)位(あり(ま)ひ(し)り(位)勢(を)
 被(を)へ(に)内(外)二(を)も(小)信(尼)の(ま)が(れ)数(福)
 と(ゆ)り(ま)し(す)去(る)の(ま)あ(る)は(延)長(式)位(勢)面(を)
 乃(三)綱(目)神(と)中(を)い(ひ)終(と)後(紙)とい(ひ)塔(と)
 あ(る)ま(と)い(し)事(と)願(を)ま(と)し(ひ)信(と)勢(を)
 一(ひ)危(と)女(勢)も(と)云(齊)と(片)唇(と)ひ(これ)と(肉)

守まの三戸あつてひここび庚申とちれがこ
 戸使守又大年庚辰よしく勢を三尾代姓
 常より人牙の中みわきを飛とうりひひ
 一庚申の日は烈りての上帯の御あり
 他ともあぶまのまげ三尾と總べーかくれとく
 舟まばとれたら雅儀ゆべーたと感直御
 いそくこすの邪とましく人刀代の中みあり
 人乃善悪とよく考悪く庚申乃日ごとく
 三尾代野のわまの西代天曹乃氣に上りて此
 人まうくりごとたの悪事と知後ひころも異

小波ぐされ人乃あわまらたされが恐り一紀
 十二年乃あ命とうりひ少すま一算さす日
 乃命とうごあまをいと神ぐまのぼり
 てこれをとさけよとありかか石の御身か
 んが候ざんまたんや積善れ家より御身
 何り積不善乃家小の御身あるを人乃
 あり候御の理ありとるあま玉善と存して
 庚申の取柄とてとてありぬまを
 まぬうゆくととる人よ悪と存
 おれ玉善とて一程とて小はまが

お下りあき程くして去るもりやとんや庚
申とちよしの勢乃義よあさすう代お孫
らびして勢明よとらとら今世の俗これと
去るほど懺念とすうとて庚申と勢りと懺
あやまの乃とれ何程なりあつて又勢報
あさ庚申ハ機回差大勢乃勢と勢乃日あさ
お代大勢とすうのういふも侍とてこれ又
附會の徳あり又庚申金あり申も金あり
金と金と朝すの日あさつて一むぶ日あり
はあよ中お土と入ておまは勢とていふなり

先又勢報ありとけのにお刻といふと庚申
あささやういひなりと勢よおまのさ事あり
勢と侍とたげ流儀よ去らるは始終妖あり
るりと侍とさび去る可なりまれハ柳子屋三戸
と勢又ありと勢報と勢報ありと勢報と勢報
り文に勢とらあり又勢報よ庚申乃勢と
勢とれ勢報して勢氏とけりつと勢と去るせり
海彦とらうと代勢ありと事と知るかとの
勢報探候よと勢と勢と勢と勢と勢と勢と
おも又げ勢ありととていふは勢と勢に堪たり

新野別り初に初共守唐申と云るに
とく張籍の周岳代領一唯教推甲子不倍
唐申と云るよし

世倍西九月とて比二月と拘忌事と云るに
中毒子もあつたてとくあると云へり
西九月と云る唐より來比忌あり
小つて佛法此二月為齋素月不宣掌教
是破倍乃今京師官命下州任初不忌此月
而差殊更少外友不西之若る初敗更何
至思之甚也一り又郡郡代群領一云く西

九月不上友戴城のそく新氏乃多働よ天帝
新家後と云く四代神別と云るは九月一
梅して人乃善教と書す此三月有曠部別と
て一は唐人これと云く死刑と云るは子曰云
月首花國と唐事と云るは石上友流世因
之と云るは唐と云くは唐唐氏乃依より
理の事なれは乞物と識するよ及び世人
多しすけ拘忌もあつたて可あり
と云るは西月と唐尅乃傳と云く一鬼と厭
七月合唐義乃云る我國目を唐尅のり

世不久しと云ふ傳へたりたりと結つたな
も辨ずる志有りけり是の唐史より紐
年中 鐘道と云ふ所の料 卒小愈せり乃至
せざる事と云ふ所の 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の
されと 袍帯を飾りて 舞せぬ 明堂
元年の四月元日の 杉井 春ふひくろ小鬼
り 虚耗と飾りて 玉節と云ふ所の 時より 大鬼
て小鬼と云ふ所の 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の
こまぐらつと云ふ所の 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の
を 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の

解るる紙巻の世と結せんがなむ 誓て 玉節
耗乃 鬼と降くしりて 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の
是 遠まよ命と云ふ所の 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の
は 之らまよと云ふ所の 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の
走 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の
が 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の
は 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の
を 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の
鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の 鐘道と云ふ所の

本草の經目よ何珍ういそく菌種よ種魁ハ菌風
也と何り又考工記乃流よ終葵ハ推乃名あり
中かんへり菌推の形小似より推又菌の形よ
似これら心と同す俗よ種乃一推と執る鬼と
うの圖と畫て寂種魁とらづく事と好むその
國々種魁の俗と俗とこれ其第ハ鏡出とく
鬼と嗜ふとよ遊よ名ありとありてそれ種と
し

種魁ハる時珍ハ後といそ種魁とすべ
種魁史ハ後のできハ其種あり何ぞ乞也

まらよ堪んや考く書と修せば書有たふ志り
しとらるるむむあるれ

又お初あそい元と大師とて並意傳る傳と書
ていつなよとつせ種痛とよせぐまがまひらん
よしそく修ハる家とてはとらるるあり元意種
小並重傳る新傳と取ハる民屋よ押ハるの
傳教時後とて言とらるるしと世とてと家
新傳と重ハるありとと種魁実種ととらる
りんと又種よ後と跡ととらるるしととらる
知るるうやうのそめを乞也と口舌とて

阿そい糸一造とまび理切らるるがよの
ひくろくたき糸とまび一

ひ月樹木と樹栽一西日と木とゆり上付す
中古書と刃えり下樹と切り地は挿と廿月
ゆ一又花葉と樹栽をひ月より一と月令
産義より一これより糸をひり糸とゆき織
生涯よりあるや老政全書より一凡徳草本
と樹ふ下強乃後上強の糸より
八日と地帯八月と強く強より樹と一糸一
糸盤片より付木の生涯全く枝葉よりある

下強は廿三日
と上強とい

移せはを性しやう移本をいばも本とやう
又その凡果木とゆりゆり先九月の中其後
樹れまうくと強く縄とゆきまうくとかきやう
しりわくみい肥土と入水と澆一次年正月
うつらゆ一樹栽の時と半分を樹栽に
おとつとかきと一とよやうなる土と加え
地画より二三寸たく志くより一ととるにた
く運く一決裁そのら中月やい毎の氷と澆
廿月柳の枝と切て地は挿ハ速く強くと月令産
義より刃えり凡ひ月枝と挿て可る本の枝

栲樹根園栲紅崖松海紅海棠山藥花石栲
山藥薯蕷葛根栲樹等名あり其法葛土と日
よか細葉一砂土と等分して炙りて
よくまへらせすむるを地よ志をうしむかきて
枝とる年のごくよくき別のおけなきなる
えごみき先完とよく七折くこの完よえぎ
たる枝と何あすよくと折くあすよくを
陰地より一或はよよあひよまよ一日とむ
ありのやれごとくは海せざるすすな
秋よむして根せむたる時移くうゆべり又特

冬よ葛薯せざる木い又月栲多の時挿てよく
根を薯蕷の末を西月よ挿へ一凡そ木実
うくをいいたやくも一秋貴利用よ薯何を
後よ十年の利を樹と挿くあはよとるなる
よりく次凡若の木と樹く函系とま一日と
中よ越んでよく代を種と挿く一その記と書
類とあは下よとに凡そ木の葉あり挿する可也之
中よ最可親といひ親物抄親法自は可也
無与人同くその可物書書とあつると親
て至地生物の記とうりて記を多し

歐陽子の花待

淡紅紅白宜相間
之後仍須淡
我欲何處
橋酒去
一日不花開

楊梅香の待

三返初開是梅
三返有剛明
三返香
三返一返花飛一返次

趙白香の待

白藥根根送
何年乃見
子垂
老矣但欲
深塔松石同
園花結子時

四月之夜生れ初あり
ある木とらるるあり
ある木あり

果とらるるあり
ある木とらるるあり
ある木あり

むもれらるるあり
ある木とらるるあり
ある木あり

は事月令より
ある木とらるるあり
ある木あり

會秋の時
ある木とらるるあり
ある木あり

時此者也
ある木とらるるあり
ある木あり

とふ時といふ
ある木とらるるあり
ある木あり

天我へり
ある木とらるるあり
ある木あり

動全綴よ
ある木とらるるあり
ある木あり

ある固密して
ある木とらるるあり
ある木あり

げ月狸肉と
ある木とらるるあり
ある木あり

生葱とくへい而も遊風と起す又梨とくへい
くまうれ又櫻餅不付此物と考へて飛鷹
乃動と遊へし
月令廣義 書

凡一年又七中二候あり又日と一候と一候と一
動と一候と一月と一候と一候と一候と一
西月より十二月まで毎月各七候と考へて起
西月乃六候中一候風細凍中二候蟲始振中
三候上氷右立候乃三候中一候中氷魚中
又海原中氷中本筋動中氷乃三候あり
凡一日一候漏刻の數とて百刻百刻ハ漏刻の

何よとて下等よとて起る候あり陰陽此
長に考へて候乃長短ひしし
候乃考へて候乃下く候乃下候乃下候乃
ししし下中四氣中候乃下候乃下候乃下候乃
先立候ハ五箇中三刻中分候中分候中分候
十分合百刻あり而氷ハ五箇中六刻中分
候中分候十分あり凡六中分と一刻と
月令廣義

日守集附記卷之二終

日守集附記卷之二終

